

## 9 頸髄損傷者の社会参加状況別の特徴

病院第一機能回復訓練部 今村藤香 井上美紀 山本正浩 野月夕香理  
伊藤 伸 深澤佳世 堺本麻紀

【はじめに】昨年度は、東京都または埼玉県在住の C4、C5 機能レベルの頸髄損傷者（以下頸損者）について家屋や生活状況を調査し、高位頸損者であっても人的介助や最小限の家屋改造で在宅生活が可能になると報告した。今回は更に調査数・調査地域を拡大し、ADL や余暇、仕事などの社会的活動を調査内容に加えたところ、「就労したい」「地域参加がしたい」など、何らかの社会参加を希望する者がほとんどであった。そこで、頸損者の社会参加状況別の特徴をまとめ、社会復帰に向けた関わり方について考察した。

【方法】対象は当院で入院作業療法を実施した頸損者の内、関東近郊で在宅生活を送っていて、調査の同意が得られた 22（男 21、女 1）名。機能レベルは、C4：7 名、C5：5 名、C6：5 名、C7：4 名。年齢は  $38 \pm 17$  歳、受傷からの期間は  $1294 \pm 903$  日、在宅期間は  $633 \pm 719$  日だった。作業療法士 2 名で自宅訪問し、所定の調査用紙に基づき聴き取り調査を行った。調査結果を社会参加状況別に 4 つの群に分け、特徴をまとめた。

【結果】社会参加状況別に分けた特徴を表 1 に示す。**就労群**（C4：1、C6：2、C7：2）：年齢  $30 \pm 5$  歳でほとんどの者は受傷前に就労経験があった。全員、東京・横浜在住で外出頻度が多く、余暇に対する不満が少なかった。一方、時間をかければ可能な更衣・移乗などの ADL が仕事を優先させるために介助になるなどの悩みがあった。**就労希望群**（C4：4、C6：1）：年齢  $27 \pm 5$  歳と若く、高位損傷が多かった。ほとんどの者が地方在住で家族と同居していた。居住地域の環境要因や活用出来る社会資源が少ないことから、行動範囲が制限されていた。就労に向けての準備段階は、資格取得のために勉強している者から情報収集の方法がわからず行動出来ない者まで差があった。また、介助者に理解してもらえるように自分の要望を伝えることが難しいという意見があった。**就労希望無し群**（C4：3、C5：4、C6：1、C7：1）：年齢  $56 \pm 10$  歳と高く、全員既婚者だった。外出頻度が少なく、余暇の充実や地域参加を希望する者が多かった。**就学群**（C5：1、C6：1、C7：1）：年齢  $18 \pm 2$  歳で、1 名のみ単身生活だった。就労群に比べると退院時から ADL の自立度に変化はなかった。

【考察】就労群だけではなく、それ以外の対象者も仕事や地域参加など各々の生活状況に合った社会参加を希望していた。就労希望の有る者は、高位頸損かつ地方在住者が多かった。就労が難しい要因として、身体障害が重度であること、地域によっては就労に対する支援体制が不十分で就労可能な場所や職種が限られることが考えられる。就労の可能性を広げるためには、退院後の生活状況に合った排便方法の検討、仕事に関連づけた訓練内容の工夫などが大切であると思われる。就労希望の無い者は、地域に関わらず高齢の頸損者が多かった。入院中の関わりだけではなく、在宅復帰後も獲得した知識や技術を継続出来るように、地域と連携を図ることが重要と思われる。

《表1：社会参加状況別特徴のまとめ》

●=1名

		就労群	就労希望群	就労希望無し群	就学群
年齢	0~20		●●		●●●
	21~40	●●●●●	●●●	●	
	40~			●●●●●●●●●●	
機能レベル	C4	●	●●●●	●●●	
	C5			●●●●	●
	C6	●●	●	●	●
	C7	●●		●	●
地域	東京、横浜	●●●●●	●	●●●●	●
	その他		●●●●	●●●●●	●●
同居	単身	●●			●
	家族と同居	●●●	●●●●●	●●●●●●●●●●	●●
ADL介助量	変化なし	●●●	●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●
	増加	●●			
	減少				
余暇	テレビ、音楽鑑賞	●	●●●●	●●●●●●●●●●	●●●
	読書、パソコン	●●●●●	●●●●●	●●●●●●	●●●
	外出(週3回以上)	●●●	●		
主な生活の希望	ADL	介助量増加 便失禁の不安 排便コントロールの悩み			便失禁の不安 排便コントロールの悩み
	介助者との関わり		介助者に自分の要望を伝えることが難しい	介助者に自分の要望を伝えることが難しい	
	余暇		外出頻度が少ない	外出頻度が少ない 地域参加がしたい	
	社会資源		活用出来る社会資源が少ない	活用出来る社会資源が少ない	

就 労 群

- ・下位頭損者や東京都在住者が多く、単身生活者がいることも特徴的だった。
- ・外出頻度が比較的多く活動的に過ごしている一方、出来るADLであっても時間的制約を理由に介助量が増加したり、便失禁の不安、排便コントロールの調整(食生活への配慮、排便時間が長い等)など、仕事を行う者特有の悩みがあった。

就労希望有り群

- ・全員若年かつ家族と同居で、大半が東京・横浜以外在住の高位頭損者だった。
- ・外出可能な場所が限られるため、外出頻度が少なかった。
- ・就労出来る場や職業訓練を受けられる施設がないなど、就労につながる社会資源が不十分だと感じる者が多かった。

就労希望無し群

- ・平均年齢が高く、全員既婚で家族と同居していた。
- ・余暇活動は、屋内での受動的活動が主で、外出頻度が少なかった。
- ・地域で利用出来るサービスの少なさを不満に感じていた。また、他者と交流したり自分をアピール出来る場を増やしてほしいと希望する者が多かった。

就 学 群

- ・全員退院直後から復学していた。
- ・就労群と同様に時間的制約のある環境ではあるが、就労群に比べると、家族の援助や学校側の配慮が得られるため、退院時からADL介助量に変化はなかった。
- ・便失禁の不安、排便コントロールの調整(食生活への配慮、排便時間が長い等)などの悩みは就労群と同様にあった。